バシェの音響彫刻プロジェクト

2021 年度活動報告

バシェの音響彫刻との出会いから 6 年…この 6 年間に知ったこと、経験したこと、考えたことについては、本誌の研究ノートとして投稿させていただいた。ここでは今年度 9 月下旬以降の主な活動について報告する。

【作曲特別演習での学び】

音響彫刻 2 基（渡辺フォーン・桂フォーン）は、しばらく本学大学会館ホワイエに解体された状態で置いてあった。9 月、ある作曲家からバシェの音響彫刻の音を聴きたい、という申し入れがあり、良い機会なので作曲特別演習の授業の一環として、学生と一緒に桂フォーンを組み立てることにした。作曲特別演習は作曲専攻学部 1・2 回生のためのゼミである。音響彫刻は解体された状態では音が鳴らない。学生たち一人一人にスパナとペンチを持たせ、ワッシャーとナットで拡声盤を固定させていく。締め方が緩いと音がうまく鳴らないし、拡声盤同士がわずかにでも当たっていると、ビリビリと濁った音が発生する。振動が拡声盤に直接伝わるからだ。小 1 時間ほどで組立て終わり、みんなで試奏する。素手や、素材の異なるバチや弓などを使って、音色の違いを調べる。私もこれまでたくさんの奏法を編み出してきたつもりだが、1 人の学生が今まで聴いたこともないような新しい音色をまた一つ発見した。ドレミを持つ楽器のために曲を作り、五線紙に音符を並べることが作曲であると固く信じてきた学生たちへの、違う角度からの一つのメッセージになることを祈っている［写真 1］。

［写真 1］作曲家・坂田直樹氏（左端）と共に桂フォーンを組み立てた「作曲特別演習」の学生たち

【サウンド＆アート展への参加】

2021 年 11 月 6 日～21 日、東京のアーツ千代田 3331 において、「サウンド＆アート展」が開催された（主催／クリエイティブ・アート実行委員会、共催／東京都教育委員会、企画制作／ミューズ・カンパニー）。この展覧会は「見る音楽、聴く形」をテーマに、新しい創造的な楽器やサウンドをめぐる作品を集めたもので、そこにバシェの音響彫刻と教育音具パレット・ソノールも招かれたのだった。バシェの音響彫刻としては東京藝術大学で修復された勝原フォーンが出品された。12 日に行われた視覚に障害のある方々対象の展覧会ツアーで、私はバシェ・コーナーの音の紹介と、ツアー参加者が音響彫刻に触れて音を鳴らす際の補助をさせていただいた。視覚に障害のある方々の反応は鋭く、振動に敏感であることがよくわかった。彼らがバシェの響きをどのような形に捉えているのか、知りたいと思った。

翌 13 日には、本学から送り出した教育音具パレット・ソノールを用いて、まず小学生対象の音楽ワークショップを行い、その後、指導者対象のバシェ・ワークショップを行った。

また、バシェ・プロジェクトの客員研究員である川崎義博氏も、会場でバシェ音響彫刻や教育音具をセッティングしたり、トーク・イベントにも出演するなど、このサウンド＆アート展に貢献した［写真 2］。

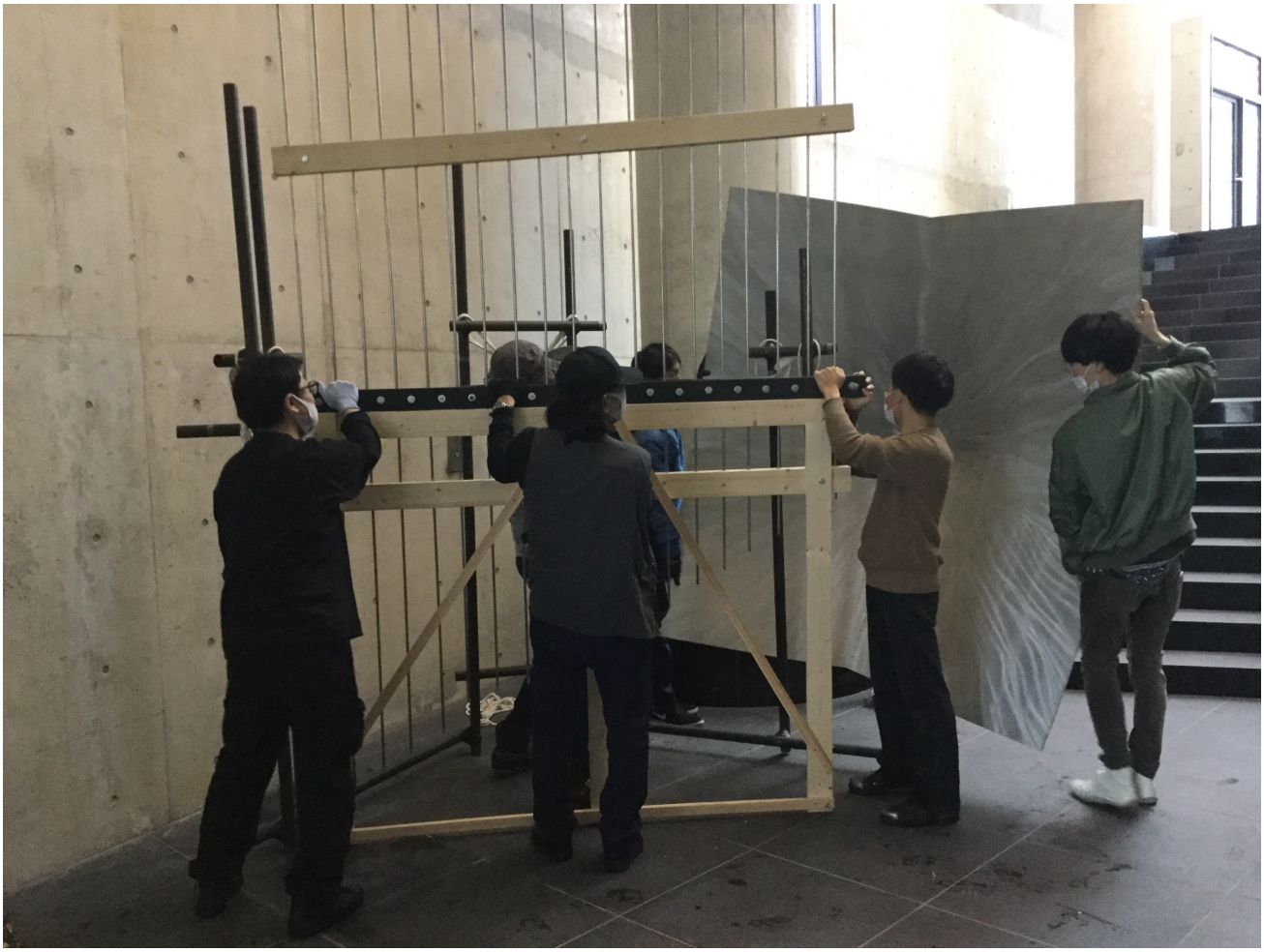
［写真 2］「サウンド＆アート展」視覚に障害のある方々対象の見学ツアーにおいて、バシェの音響彫刻の音を体験して

【音響彫刻の解体・組立解説動画の制作】

これまで学外で音響彫刻を用いたコンサートなどを行う場合、必ず問題になるのが音響彫刻の［解体→搬出→搬入→組立］の往復に関わる、人手と技術と経費であった。特に渡辺フォーンは、土台が非常に重い上に、19 本並んだ金属棒

の長さは総計 4m30cm にも及び、拡声盤は 2m 四方もある。これらを安全に動かすには、構造を理解している屈強な人間が最低 6 人は必要である。この［解体→…組立］作業に、初期の頃から直接携わってくださったのが黒川岳氏（本学非常勤講師）いただくであった。黒川氏には 2019 年度後期、渡辺
フォーンを解体・運搬する際に部材を支える道具を制作していただいている。2020 年度に数回あった［解体→…→組立］の機会も、常に黒川氏ありきのもので、この先、いつも黒川氏に頼ってばかりはいられないのが現状である。そこで解説入りの［解体・組立］動画を作り、それを見て構造や手順をあらかじめ理解し、黒川氏がいなくても確実に安全に解体・組立作業ができるようにすることが、この解説動画制作の目的である。撮影は 12 月に行われ、年度末までに編集される予定である［写真 3］。

岡田加津子（音楽学部教授）



［写真 3］渡辺フォーンの解体風景を収録する